

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：22101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11006

研究課題名（和文）医療型障害児入所施設における新たな包括的家族支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a new comprehensive family support program in a medical facility for disabled children

研究代表者

藤岡 寛 (Fujioka, Hiroshi)

茨城県立医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：90555327

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：親子入園において、母親と父親の協働の実態と双方の認識を明らかにするために、親子入園のケースについて、当該家族の受け持ちスタッフから情報収集を行った。母親と父親の間で綿密に意思疎通を図りながら入園生活を継続しているケースがある一方、入園中の母親が在宅の父親の生活実態をほとんど把握していないケースもあり、スタッフも夫婦協働に向けて介入できていない状況であった。今後はスタッフや当該家族への面接を実施し、様々な状況を把握する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

親子入園における夫婦協働の実態が明らかになったことで、今後の親子入園における支援において、入園する家族員だけでなく、そのパートナーとの協働に向けての支援方略を検討することが可能となった。

研究成果の概要（英文）：In order to clarify the actual situation of collaboration between mothers and fathers and their mutual understanding when a parent and child enrolls in a nursery school, information was collected from the staff in charge of the family in question. While there were cases where the mother and father continued to communicate closely with each other while the child was enrolled in the nursery school, there were also cases where the mother had almost no understanding of the father's actual living situation at home while enrolled in the nursery school, and the staff were unable to intervene to promote collaboration between the couple. In the future, interviews will be conducted with the staff and the family in question to understand various situations.

研究分野：小児看護学

キーワード：親子入園 コペアレンティング 障害児

1. 研究開始当初の背景

リハビリテーション領域において、脳性麻痺児をはじめとする肢体不自由児に対する集中訓練の効果が認められており、特に低年齢期からの介入が必要とされている^{1,2)}。そこで、養育者である母親が児と共に施設に入園し、母親が付き添いながら児が集中訓練を受けるプログラムがある。これを母子入園と呼び、全国の旧肢体不自由児施設(2012年度から医療型障害児入所施設に改組)59施設のうち18の施設で行われている³⁾。

母子入園は、乳幼児の集中訓練実施のための現実的な方法である一方で、スタッフからのアドバイスと一緒に入園している母親同士のピアサポートを受けることで、母子の愛着形成を促進し、母親の養育意欲を高める効果があると言われている^{4,5)}。応募者は、母子入園を通じて、児の理解が深まり、他の母親と情緒的な絆で結ばれ、サービス利用をはじめとする療育上の方略が得られるといった、母親に対する効果を明らかにした⁶⁾。

しかし、家族の背景が多様化・個別化する中で、厚生労働省の通達⁷⁾に基づき、各施設は母子入園の名称を親子入所に改め、支援対象を母子だけでなく父親等他の養育者に広げるよう再編を進めている。(本研究では、「親子入所」のことを、対象施設で通称使用されている「親子入園」に読み替えることにする。)

児の養育の中心的役割を担うのは母親である場合が多いが、父親も養育に関わっている。応募者は、障害児の父親の養育上の役割として、母親同様に児のケアを行うことに加えて、母親の相談を受けること、家族全体の余暇活動を実践すること、母親と共にサービス提供者や行政担当者と交渉することを明らかにした⁸⁾。

ここで問題になるのは母親・父親間の差異である。応募者は、主養育者(主に母親)は配偶者と比べて、睡眠時間が短く、夜間中途覚醒が頻繁であり、介護負担感が高く、QOLが低いことを明らかにした⁹⁾。両者間で養育に関する生活状況や認識が異なっていることから、両者が統一して協働感をもつことは難しく、中には著しく乖離しているケースが報告されている¹⁰⁾。母親・父親の両者が障害児の養育に向けて互いの状況を共有し協働していけるよう、家族全体の支援が必要である。

親子入園では、父親も入園対象としている。しかし、父親の多くは就業しているため、実際には母親が入園するケースが多い。その場合、母子が手厚い支援を受け一方で、父親は母子から離され、孤立してしまう。母親・父親間で養育に対する態度や目標に食い違いが生じて、父親が養育からも家庭からも離れてしまうことも少なくない。実際に、親子入園の数年後に離婚に至ったケースが報告されている¹¹⁾。

2. 研究の目的

本研究では、親子入園をした母親と父親の協働の実態と双方の認識を明らかにし、「親子入園における母親と父親が協働するための支援ガイドライン」を策定し、ガイドラインに基づいた支援を導入し、その効果を評価することを目的とする。

3. 研究の方法

昨今のCOVID-19の影響により、対象を親子入園スタッフに現局してヒアリングを行った。

4. 研究成果

親子入園スタッフからのヒアリングにより、父母間で下記の違いが明らかになった。

・子どもの障害に対する認識

母親が医療者から十分な説明を受け、我が子の障害の状況を理解しているのに対し、父親は「そのうちよくなるだろう」という自身の固定観念にとらわれて、我が子を理解しようとしていないケースがあった。

・育児役割

母親が日々の児のケアを担う一方で、父親は時間的に児の直接的なケアに関わっていない。父親は中長期的な視点(例えば、進学・就職・住居等)で子どもの将来を考え、それに必要な情報収集をしようとしていたケースがあった。ただし、父親の我が子に対する障害認識が十分でないゆえに、そうした父親の行動は、母親にとっては的外れな行動に映っていた。

親子入園を契機に、父親が変容するケースもあった。

・児の障害理解の共有

親子入園により、父親と児が生活を共にすることで、我が子の障害に対する理解が不足していたことに気づき、改めて理解しようとするケースがあった。「おれ、何も知らなかったんだ。」「なんでこの検査結果になるのか理解できない。今度、医師にきいてみよう。」そうして、母親・父親とで我が子の障害理解を共有していった。

・児への思いの乖離

父母ともに、我が子を理解し、ケアや養育を続けていく中で、児に対する思い(養育やケアを継続していく思い)に乖離が生じ、それが広がって、父親が母子とともに生活を共にすることが

できなくなり、離婚に至るケースもあった。

今後は、父母自身からのインタビューもを行い、当初の目的である、両親協働するためのガイドライン策定とその評価に向けてあらためて研究を継続していきたい。

5. 文献

- 1)朝貝芳美, 渡辺泰央. 脳性麻痺児粗大運動に対する集中訓練の意義. リハビリテーション医学. 2003; 40: 833-8.
- 2)Bower E, McLellan DL. Assessing motor-skill acquisition in four centres for the treatment of children with cerebral palsy. Developmental Medicine & Child Neurology. 1994; 36: 902-9.
- 3)全国肢体不自由児施設運営協議会.平成 24 年度全国肢体不自由児施設実態調査報告書. 2013; 1-8.
- 4)荒木暁子, 片山ゆかり. 母子入園中の乳幼児期の障害児の母子相互作用を促進する看護援助. 千葉看護学会誌. 2003; 9: 9-15.
- 5)朝貝芳美. 利用者へのアンケート調査による親子入園の意義. The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine. 2013; 50: 649-53.
- 6)藤岡寛. 障がい児をもつ母親のエンパワメント獲得につながる母子入園での体験. 外来小児科. 2012; 15: 211-6.
- 7)厚生労働省. 障害児入所施設における親子入園による療育について. (平成25年2月13日障発0213第1号).2013.
- 8)藤岡寛, 涌水理恵, 佐藤奈保, 西垣佳織, 沼口知恵子, 岸野美由紀, 小沢浩, 岩崎信明. 在宅重症心身障害児の家族エンパワメントにおける父親の役割 父親への面接調査 . 日本重症心身障害学会誌. 2015; 40: 359-66.
- 9)藤岡寛, 涌水理恵, 西垣佳織, 松澤明美, 岸野美由紀. 学齢在宅重症心身障害児の主養育者とその配偶者それぞれのQOLとその関連要因. 日本重症心身障害学会誌. 2019; 44(1): 169-76.
- 10)佐藤奈保. 乳幼児期の障害児をもつ両親の育児における協働感と相互協力の関連. 千葉看護学会会誌. 2008; 14: 46-53.
- 11)大橋麗子, 田中千代. 親・家族になる過程を支える取り組み-医療型障害児入所施設における「親子入園」をととした支援. 小児看護. 2014; 37: 1015-20.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------